

く。病死説とは、天皇が痘瘡とて
に悪質な紫斑性痘瘡ないし出血
性膿疱性痘瘡によって死亡した
という説である。この二つとも
出血性痘瘡と呼ばれるものだ。
ところが最近、医学者の橋本
官の日記にも依拠しながら、孝
明天皇が慶應2年12月12日に発
病、24日から結痂(かさぶたが
できる)期に入ると予想される
2年12月)。橋本氏は典医や女
官の日記にも依拠しながら、孝

6粒などになり、食欲も回復していった。孝明天皇は23日まで通常型痘瘡の経過をたどり、たのに、24日に急に容体が変化し、25日には死亡した。

ある史料には、「御九穴より御脱血」とあるので、主として

か、早期出血型は電擊型痘瘡といふくらいで発熱後6日くらいに突如死ぬので、天皇の症状とは違う。後期出血型では発疹出現後も頭痛などの激しい症状が治まらず、癰瘡が膿疱まで進んだ天皇の症状は後期出血型と異

渤海僧正の日記では、20日に至り、皇の具合がだいぶ回復し、30日の謝礼が「下しおかれ」た。21日の典医日記には、「もう峰は越した。後は『快復を待つばかり』とあつたのに、24日夕から容体が急変し、25日に急逝した。

であり治癒に向かっていた点までを禁欲的に説明したのである。医学の立場から冷静な症状分析を進める上で、今後の歴史学研究にも刺激を与えた。橋本氏に敬意を表しておきたい。(やまうちまさゆき)

歴史の交差点

神田外語大学客員教授 山内昌之



孝明天皇の死因

歴史学の研究では十二分に論じられていないテーマが多い。幕末の孝明天皇の死をめぐる謎もその一つであろう。大きく言えば、病死か毒殺かということを示した（日本医史学会関西支部『医譚』通巻129号、令和だ。毒殺説はひとまずおいてお

前発疹期から12日で結痂期になるのは、通常型痘瘡の経過とほぼ一致しており、病状も回復途上にあつたとされる。食も19日には「湯之下御一碗」だったのが、23日には片栗粉菓子・おひたし・干し飯1碗・もろこし粘膜から出血して死に至る痘瘡もあるのかと、橋本氏は問い合わせを進める。世界保健機関（WHO）の分類に従つて、5種類のうち4種類は天皇の症状に該当しないと証明した。残された出血型は早期と後期に区分される

なるというのだ。
橋本氏はニュージーランドの
医学者の説にも依拠しながら、
天皇の痘瘡が予後良好の通常型
で痘疹から出血した可能性がある
ことを紹介する。その後の症
状は通常型の通りに進み、紫斑

天皇を治療した15人の典医で
もない人物は死因を黒痘瘡（出
血性膿疱性痘瘡）に求めたが、
これだと発疹発現後も激しい症
状が続くはずなのに、天皇には
その症状がない。とすれば、痘
瘡が直接に死をもたらしたとい

Copyright © The Sankei Shimbun. All rights reserved. 掲載記事、写真の無断転載を禁じます。